

教育新聞

週2回 月・木発行
 発行所 教育新聞社
 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-40
 代表 ☎ 03(3295)7051
 (購読申し込み・お問い合わせ)
<http://www.kyobun.co.jp/>
 (購読料・月額) 2,500円+税
 ©教育新聞社 2014



多賀謙治(たが・じょうじ) 研究員II 中学校社会科教師の経験をもとに、歴史教育、IT教育に関わってきた。著書に『知るほど楽しい鎌倉時代』(理工図書)など。

中華料理の醍醐味は高温の油でざっと揚げ、それに調味料を加えて一気に炒め上げるところにある。「炒」とか「爆」の文字がつく料理は読者も食されたことがある。ところでこの調理法、日本とも関わりがあるということをご存知だろうか。

中国5千年の歴史はそのまま中

第1回

子どもの多様な見方を生かす 社会科授業

玉川大学教育博物館研究員・玉川大学講師
多賀 謙治

華料理の歴史ともいえるが、高温で一気に加熱する調理法、実は700年前にのみ出されたものであり、当時の中国人を怖れさせた元の侵略と密接な関係を持っていた。日本では、鎌倉時代の後期といふことになる。

華料理の歴史ともいえるが、高温にも大きな変化を与えた。人々は苦肉の策として薪の不足分を稲わらで補ったのである。わらはは一気に燃え上がり高熱を発生し短時間で燃え尽きる。これが今日の中華調理法のルーツである。

この切り出しが当時から大切な仕事だったことがわかる。さて、農民が伐りだした木材の多くは国内の建築に用いられたが、かなりの量が中国にも送られていた。当時の輸出品は銅や硫黄や刀などの工芸品が主であったが、木材も相当量が取り扱われて

自分の教材を作ることの意義

に日本での流通を目的として輸入されたものでもある。銭貨の輸入は清盛以後頻繁に行われており、宋の記録には、日本が大量の銭を輸入するのでデフレーションを起したと書かれるほどであった。800万枚の中には、当然木材の代金も含まれていたことであろう。鎌倉時代は物々交換の時代ではなく、我々が思っている以上に貨幣経済が浸透した時代でもある。

華南に集中させた。当時この地域は宋(南)と呼ばれ、長江による肥沃な農地や森林を擁していたが、膨れ上がった人口を支えるために木々は伐採され建材となり、農地は拡大していった。記録ではあまりにも多く木を伐ってしまったので棺桶を作るのにも窮したとある。

た。日本である。日本史で「地頭の横暴」として必ず登場する阿豆川荘上村百姓の申し状の中に「サイモクノヤマイタシエ、イテタテ候エハ、テウマウノアトノムキマケト候テ」とあるこの部分。領家のために木材を伐りだしていたところへ地頭がやってきて農民に無理難題を押しつけるわけだが、それはとりあえず脇に置いて、木材

いたのである。昭和51年(1976)韓国新安沖で発見された全長30メートルの沈没船からは、青磁・白磁の秀逸品をはじめ、荷主が日本の有力寺社であったことを物語る木簡も引き上げられた。

このように一見無関係な3つの話が教師の視点で結びつき、子どもたちの興味や理解を深めながら、元寇やこの時代の経済、あるいは荘園と地頭の関係へと発展する教材になるといふ話である。これから1年間、子どもの多様な視点を生かすための工夫や要点を、実例で示しながら考えていきたいと思う。

深刻な木材不足はやがて調理法

深い